信濃の国筑摩の湯に沐浴のこと

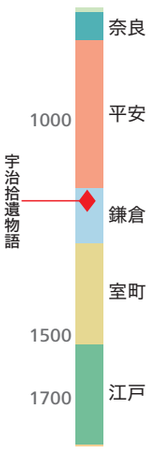
今は昔、[1]信濃の国に、[2]筑摩の湯といふ所に、よろづの人の浴みける薬湯あり。そのわたりなる人の夢に見るやう、「明日の[3]午の時に、観音、湯浴みたまふべし。」と言ふ。「いかやうにてか、おはしまさむずる。」と問ふに、答ふるやう、「年三十ばかりの男の、鬚黒きが、[5]綾藺笠着て、[6]節黒なる胡籙、[7]皮巻きたる弓持ちて、紺の[8]襖着たるが、[9]夏毛の行縢はきて、[10]葦毛の馬に乗りてなむ[11]来べき。それを観音と知り奉るべし。」と言ふと見て夢覚めぬ。驚きて、夜明けて、人々に告げまはしければ、人々聞き継ぎて、その湯に集まること限りなし。湯を替へ、めぐりを掃除し、[12]注連を引き、花、香を奉りて、ゐ集まりて待ち奉る。

やうやう午の時過ぎ、[13]未になるほどに、ただこの夢に見えつるにつゆ違はず見ゆる男の、顔よりはじめ、着たる物、馬、何かにいたるまで、夢に見しに違はず。よろづの人、にはかに立ちて額をつく。この男、大きに驚きて、心も得ざりければ、よろづの人に問へども、ただ拝みに拝みて、そのことと言ふ人なし。僧のありけるが、手をすりて、額に当てて拝み入りたるがもとへ寄りて、「こは、いかなることぞ。[14]己を見て、かやうに拝みたまふは。」と、こなまりたる声にて問ふ。この僧、人の夢に見えけるやうを語るとき、この男言ふやう、「己は先つころ狩りをして、馬より落ちて、右の腕をうち折りたれば、それをゆでむとて、まうで来たるなり。」と言ひて、と行きかう行きするほどに、人々後に立ちて拝みのののしる。

男しわびて、わが身は、さは観音にこそありけれ、ここは法師になりなむと思ひて、弓・胡籙・太刀・刀切り捨てて、法師になりぬ。かくなるを見て、よろづの人泣きあはれがる。さて、見知りたる人出で来て言ふやう、「あはれ、かれは[15]上野の国におはする、ばとうぬしにこそいましけれ。」と言ふを聞きて、これが名をば[17]馬頭観音とぞ言ひける。

法師になりてのち、[18]横川に登りて、かてう[19]僧都の弟子になりて、横川に住みけり。そののちは、[20]土佐の国に去にけりとなむ。

（宇治拾遺物語）



1 信濃の国　現在の長野県。

2 筑摩の湯　現在の長野県松本市東郊の美ケ原温泉（白糸の湯）などが想定されている。『日本書紀』に見える。

3 午の時　昼の十二時前後。

4 観音　観世音菩薩。慈悲をもって衆生の苦悩を救済するとされる。

5 綾藺笠　藺草で編んで、裏に絹を張った笠。中央に髻を入れるための突起がある。

6 節黒なる胡籙　節黒の矢を入れた胡籙。「節黒」は、矢の節の下を黒漆で塗った矢。「胡籙」は、矢を入れて背に負う用具。

7 皮巻きたる弓　握る部分を皮で巻いた弓。

8 襖　狩衣（平安貴族が常用した略服）に裏地をつけたもの。

9 夏毛の行縢　夏の鹿の毛（夏には毛が黄色になって白い斑が鮮やかに出る）で作った行縢。「行縢」は、馬に乗る時、腰につけて前に垂らした覆い。

10 葦毛　馬の毛色の名。白い毛に黒色・濃褐色などの毛が混じっている。

11 来べき　出典の本文は「候ふべき」とあるが、文意を通りやすくするために、「来べき」と改訂した。

12 注連　注連縄。聖域の周囲に張り巡らす縄。

13 未　未の時。午後二時前後。

14 己　わたし。二人称にも使われるが、ここは一人称。

15 上野の国　現在の群馬県。

16 ばとうぬし　ばとう様。「ぬし」は敬称を表す。

17 馬頭観音　六観音の一つ。怒りの相を表し、宝冠に馬頭をいただく。

18 横川　比叡山の延暦寺三塔の一つ。山の最も奥にある。

19 かてう僧都　未詳。「僧都」は僧正に次ぐ僧官。

20 土佐の国　現在の高知県。